公益財団法人ユニベール財団
豊かな高齢社会の探究　調査研究報告書　Vol.27(2019)

人口減少時代の地方郡部の高校教育改革の実践的研究

―都鄙間高大交流による地域課題解決型学習のアクション・リサーチ―

樋田有一郎
（早稲田大学大学院博士後期／日本女子大学学術研究員）

キーワード：高校魅力化、都鄙間高大交流、アクション・リサーチ、中山間地域、島根県吉賀町

１．はじめに

筆者は島根県の過疎地域を中心に調査をおこない教育が地域活性化に果たす役割の研究をおこなっている。島根県は、過疎の語の発祥の地域であり、我が国の中で特に人口減少が先行している地域として注目されている。また、地域活性化の先進事例地域としても注目されている。人口減少による生徒数減と学校統廃合の問題が生じており、それを受けて学校存続と地域活性化のための教育改革が行われている。

筆者は、島根県の特に過疎化が進む中国山地寄りの中山間地域（地方郡部）を対象として、教育による地域人材育成の過程を調査してきた。島根県では、高校魅力化（教育魅力化）と呼ばれる町村と県立高校の協働による、将来地域で活躍できる地域人材育成の教育改革が行われている(樋田・樋田 2018)。対象地域では、進学や就職のため高校卒業までには、ほとんどの住民が都市部へと他出するという状況である。こうした中で、将来地元地域にＵターンして地元地域を活性化するための人材育成の必要性が高まっている。こうした流れを受けて、これまでのセンター試験対策を中心とした教科書学習から、地域資源を利活用した地域課題解決型の学習の導入が進んでいる。こうした教育改革は、近年我が国で進んでいる探究型の教育の導入が中山間地域で進んだ結果でもある。

本稿では、中山間地域の高校魅力化の教育改革の研究のうち、都鄙間高大協働研究と呼ばれる都会の大学生と田舎の高校生による協働研究活動について扱う。次章以降で詳しく述べたい。

２．研究の目的：都鄙間高大協働研究活動

都鄙間高大協働研究活動は、筆者の所属する地域人材育成研究会が中山間地域の県立高校、地元役場、NPO 等と連携して行っている協働研究活動である。筆者らの研究会は、2015

Study on school reform in highly depopulated areas in Japan: action research on community problem-based learning through a collaboration between urban universities and a rural high school
HIDA Yuichiro (Graduate School of Education, Waseda University / Japan Women's University)

年、2016 年と中山間地域の高校生の東京の大学への訪問を受け入れてきた。2017 年からは、大学生の中山間地域への派遣も加えて相互の行き来をはじめた。それぞれ違った環境で育ち違った主体性を持つ都会の大学生と田舎の高校生が協働して、地域の課題を解決するための研究を行う。互いの地域を訪問して異なる価値観を持つ他者との交流や自身の地域の価値の相対化により自身を振り返り自身と地域との関係を問い直すことを目指している。

調査はアクション・リサーチの形式で行われた。アクション・リサーチとは、調査者が観察者として対象と距離を置くのではなく、「組織あるいはコミュニティの当事者（実践者）自身によって提起された問題を扱い、その問題に対して、研究者が当事者とともに協働で問題の解決の方法を具体的に検討し、解決策を実施し、その検証をおこない、実践活動内容の修正をおこなうという一連のプロセスを継続的におこなう調査研究活動（草郷 2007）」である。対象の実践の中に参加し課題意識を持って、自己の主体について深く内省し、実践者が対象としている文脈における問題や状況の深い理解を目指す特徴を持つ手法である（藤田 2015）。深い内省と自身の価値観の変化にも注目する点が対象と距離を置いて単なる観察者となる手法と異なる点である。大学生は、調査員（大学生調査員）として対象地域の高校生の地域活性化の取り組みを調査するアクション・リサーチャーとして参加し、調査地域の取り組みを支援・調査すると同時に自身の地域との関わりの主体性の変化を記録した。

３．研究活動のフィールド：吉賀高校と吉賀町

島根県立吉賀高等学校（以下、吉賀高校）の 1 年生と東京の複数の大学の学生との間で協働研究を行った。吉賀高校は、島根県の中山間地域である吉賀町にある県立普通科高校である。1948 年に分校として設立され 1963 年に昇格・独立した歴史を持つ。吉賀町は過疎化の影響で急速な人口減に直面している（図-1）。吉賀高校は県内最小規模の普通科高校であり生徒数減少のため統廃合の危機に瀕している（図-2）。高校魅力化（教育魅力化）と呼ばれる島根県の高校教育改革をおこなった高校の一つである（樋田・樋田 2018）。吉賀町ではこうした教育改革は、サクラマスドリームプロジェクト（プログラム）と呼ばれる。サクラマスは、降海型のヤマメのことを指す。川で生まれて一度海に渡り、母川に回帰するときには大きく育って通常のヤマメの数倍の大きさになる。高校卒業までには地元地域を他出する吉賀町の子どもへの地域人材育成の考え方が表れている。これまでの教科書学習中心の教育にくわえて、地域資源を利活用した教育活動を行っている。高

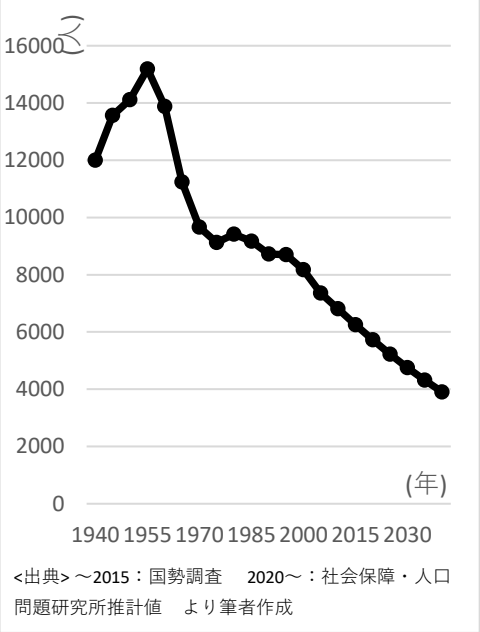


図-1 島根県吉賀町の人口推移

校生は、地域の課題と可能性を学ぶ探究型の学習（地域課題解決型学習）を行っている。卒業し地域を他出するまでに、地域での起業の仕方を学ぶこと（アントレプレナーシップ教育）を重視するのが吉賀高校の高校魅力化の教育実践の特徴である。

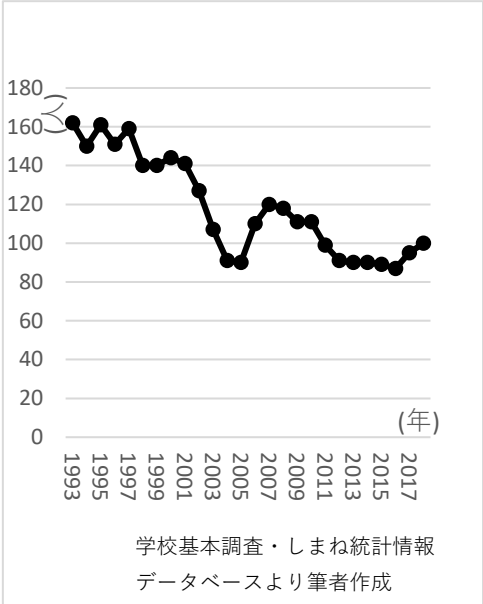


図-2 吉賀高校生徒数の推移

対象地域の中山間地域の子ども（以下、代表して高校生とする）は次の特徴を持っている。

まず、これまでの研究から、中山間地域の高校生の社会関係資本（ソーシャルキャピタル）は蓄積されているが､その内容に偏りが見られた(樋田2016b)。社会関係資本とは、地域活性化をする人材を分析する上で注目される概念である。社会関係資本は、個人に蓄積される資本（人的資本）に対して、人と人との協調行動によってもたらされる効果に着目した資本である。我が国では特に農山村を対象として、社会関係資本の多寡と地域活性化の関係が政策的にも研究が推進される。社会関係資本は、複数の分野や立場から近年研究されるが、ボンディング型（結束型）とブリッジング型（橋渡し型）の 2 種に分類される。ボンディング型はコミュニティ内で協働して地域活性化を行うことを可能とする。一方で、ブリッジング型は、コミュニティ外部の資源をコミュニティ内に導入するときに役立つ社会関係資本である。後者が不足することは、コミュニティが社会変動の中で変革の必要性を迫られたときに障害となると考えられている。

中山間地域の高校生は、ボンディング型の社会関係資本の蓄積が進んでいる一方で、ブリッジング型の社会関係資本が不足していることが調査から分かっている。中山間地域の高校生は、ボンディング型の社会関係資本が豊富であるのは、中山間地域の高校生は、幼少期から顔見知りの関係で、お互いのことをよく知っている傾向があることを背景としている。また、地域の中で注目されてかわいがられて育ってきたことも背景として考えられる。しかし、こうした凝集性の高いコミュニティで育った高校生には、キャラの固定化とよばれ、切磋琢磨したり多様な人間関係の中での成長の機会を得ることの障害が生じていることが問題となっている。近年の少子化は、学校規模の小規模化を生じさせて、より一層キャラ固定を生じさせ多様な人間関係や刺激を得る場としての学校の魅力の低下につながる可能性が生じている。高校生は、地域外の大人や都会との関係も含めてブリッジング型の社会関係資本を蓄積する必要性が生じていると言える。

筆者らのアクション・リサーチは、地域で関わることの少ない大学生世代との交流の機会を得ることにつながっている。高校生は、都会の大学生と交流することで異質な刺激を得ると同時に自身の地域について考える機会を得ている。

４．研究活動の構成

調査は、2018 年度は吉賀町側から吉賀高校 1 年生約 40 人、東京側から青山学院大学生、法政大学生、上智大学生の 27 人の計約 70 人を中心としたチームで行われた。それに、吉賀高校教員およびコーディネーター、吉賀町役場、現地 NPO 法人、吉賀町住民、東京の大学教員が協力して行った（図-3）。研究チームは 100 人を超える規模となった。

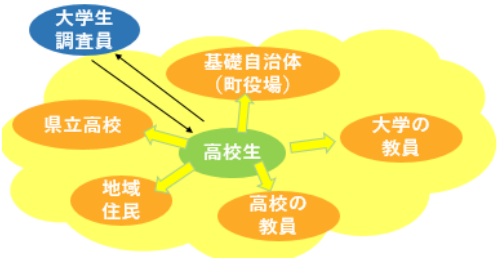


図-3 研究チーム

都鄙間高大協働研究は、事前学習（2018 年 7 月）と中山間地域でのフィールド調査（吉賀調査、2018 年 8 月）と東京でのフィールド調査（東京調査、2018 年 10 月）の 3 つの構成で行った。まず、大学生調査員が事前に東京で会合を行い、吉賀町についての事前学習、チームビルディング、調査法の取得を行った。さらに、自身の東京都や田舎に対する考えを振り返り、地域と自身のあり方を整理した。この際には、吉賀町側から吉賀町役場の担当者、吉賀高校の高校魅力化コーディネーター（高校と地域を繋ぐアクターと位置づけられる（樋田 2016a））を招聘した。つぎに、東京の大学生調査員が吉賀町に訪問し吉賀高校生とともに中山間地域のフィールド調査を行った。そして、吉賀高校生が東京に訪問し大学生調査員とともに東京のフィールド調査を行った。

写真-1 大学生調査員による大学説明

大学生調査員は吉賀高校の地域活性化の取り組みにアクション・リサーチャーとして参加した。

吉賀調査では、大学生調査員は、高校生に対して自身の大学の紹介と普段の大学生活について説明し、自身の持つ吉賀町についてのイメージを高校生に伝えた。そして、班ごとに分かれて行われている高校生の研究（表-1）に大学生調査員側も班ごとに分かれて参加し、都会の大学生としての視点から助言をおこなった。さらに、大学生調

表-1 高校生の研究テーマ

(漁業)高津川の昔と今の水質の変化、その変化の原因
(行政)吉賀町のまちづくり
(医療)小さな病院ならではの特徴
(農業)お米について
(行政)補助金がどこから出ているのか
(商業)お店の営業の仕方
(農業)Iターンしている農家さんに他地域と吉賀町の農業の違いを聞く
(医療)六日市病院と都会の病院の違い
(漁業)吉賀町の漁業の課題
(商業)七日市の商店街の活性化

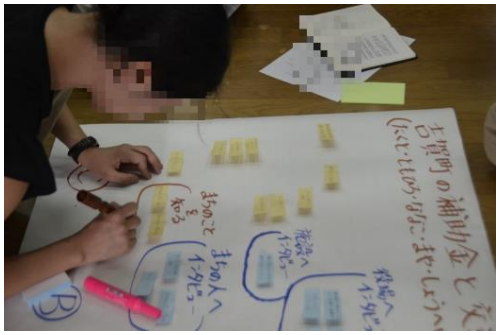


写真-2 大学生調査員と高校生(1)

写真-3 大学生調査員と高校生(2)

査員は現地の NPO や役場の支援を受けて吉賀町の生活文化の調査や吉賀町の住民へのインタビュー調査をおこなった。吉賀町の地元住民の活動を調査するため「八久呂鹿伝説」、「高津川の水源と河川争奪探究」、「高津川探究」について住民の活動に参加しながら調査をおこなった。調査を始めて、高校生は自身の町に対する知識が少ないことに気がついた。普段暮らしていて自身の町の課題や可能性を当たり前のものとなっているため無自覚になりがちである。そうした中で、都会の大学生が協働調査することによって、よそからの視点を用いて自身の町について考え直す機会を作ることが可能となった。

吉賀高校の東京訪問の際には、大学生調査員が中山間地域でのフィールド調査と高校生の研究の内容に合わせて東京での訪問先の選定をおこない、協働して東京調査を行った。大学生調査員自身が高校生の研究内容を把握し、適切な東京の訪問調査先を選定し、大学生調査員自身がアポ取りを行った（表-2)。さらに、高校側と連絡を取りつつ各訪問先の責任者に事前に研究内容を伝え訪問先と問題意識の共有を行った。実際の調査では、それぞれの産業の従事者や公的施設の責任者や活動の実践者にインタビューを行うことを必須とした。これは、先方に用意された内容を教わるだけの単なる東京視察、施設視察ではなく、東京で働く個人の考え方を調査し、東京地域での個人の当事者性を調べ、さらに、相手に吉賀町の問題意識をぶつけ、インタビューの相互行為の中で構築される当事者性を記録することを重視したためである。吉賀町の価値観と東京の価値観を、都会の大学生と田舎の高校生の視点からぶつけ合って相対化することを目指した。

表-2 東京調査の訪問先

台東区区役所環境保護課 荒川環境保護NPO
キラキラ銀座商店街
墨田区役所町づくり担当者
特定非営利活動法人メンタルケア協議会
AKOMEYA 銀座店 おむすび権兵衛 青山店
鉄道ジャーナル 新宿駅構造見学
戸越銀座商店街 （商店街振興組合 広報） 戸越銀座視察
東京農業大学「食と農」の博物館 上記併設　進化生物学研究所 （研究員）
東京都福祉保健局医療政策部医療政策課
市ヶ谷フィッシングセンター、墨田水族館職員 キラキラ銀座商店街（事務局長）

東京での調査を終えた高校生は、継続して吉賀町をフィールドに地域活性化の取り組みに関する研究を続けた。大学生調査員は SNS 等を

通じて交流を続けて吉賀高校の生徒にアドバイスをおこなった。高校生の研究内容は当初の漠然とした地域活性化の問いから、より具体的で実行可能性があるものへと変化していった。その際、東京調査での知見を生かして、都会に対しての吉賀町らしさを生かした内容のプランや研究内容へと充実していった。

2019 年 2 月に、高校生は、研究の成果を、地域住民に対して発表する発表会を開催した。発表会では、地域住民が、高校生の提案する地域活性化のプランや研究に対して熱心に質問していた。ときには、実現可能性や地域の問題点について厳しく質問や指導が行われていた。地元地域の高校生の取り組みをやさしく褒める一方で、「この点は吉賀町らしくない、むしろこのようにやりなさい」というようなやりとりも行われ、吉賀高校の取り組みに対してとる住民の真剣な態度が伝わってきた。高校に対しての期待が高いことや、高校の取り組みをきっかけに町が地域活性化を一つずつ行おうとしていることがうかがわれた。

写真-4 地域住民への発表会

５．研究活動に関するデータ

大学生調査員はフィールドワークや高校生との協働研究の様子を記録している。また自身の地域に対する考え方の変化（内省）を記録した。データは膨大であるが一部を紹介したい。なお、データは主旨に関わらない範囲で一部編集してある。

まず、下記はフィールドに入る前に大学生調査員が、調査地域や調査地域の高校生に対して持っていたイメージについて記述したものである。

【中山間地域の町のイメージ】

・田舎、水が綺麗、人が優しい、ほのぼのしてる、みんな仲良し、みんな明るい、運動神経いい、店がない、日焼けしてる、地域間のつながりが濃い、田舎に誇りを持ってる。友達とずっと一緒、野菜たくさんとれる。電波が悪い。
・交通の便などが不便そう　暑そう　電車が 1 時間に一本しか来なさそう　虫やカエルがたくさんいそう　田んぼが多そう　車が無いと生きていけなさそう　川がたくさんありそう　空が広そう　街の人がみんな顔見知りで仲良しそう 会えば挨拶
・緑や虫がたくさんあり、川が綺麗なイメージです。お料理が美味しく、まちの人は野菜などを分け合いながら一緒にご飯を楽しんでいるイメージです。夜には野生の動物や蛇なども現れるため、見たことの無い生き物ともたくさん出会えると思います。
・空気が綺麗で山が多く、自然豊かではあるが、移動が少し不便そう。いわゆる「田舎」というイメージがある。「田舎」が悪いイメージなのではなく、地域の中で、顔が見える人たちと日々生活する中で、一つの町の意識誇りを持って、住んでいる町を大切にしているイメージがあります。
・人が温かくて、すれ違う人みんなに挨拶する地域。田舎で自然がたくさんあって、癒される。食材が新鮮であったりして美味しいご飯が食べられる。人が少なく、過疎地域である。空気が美味しく、たくさんの野生動物がいる。
・自然が多くて人が少ない。スーパーやコンビニなどのお店が少ない。交通機関が発達していない。子供が少なく、学校も少ない。地域の人同士の関わりが密接で強い。その生活がどのようなものなのかはほとんど想像がつかない。
・地域の人々の協力によって、このような機会を作ってくださるあたたかい心を持った人々が多いなという印象を持ちました。失礼ですが、田舎を超えた未開の山が広がっているイメージがあります。授業でやった通り、これからの将来を考えてる活発な人々が多いイメージです。
・過疎化が進んでいるイメージ。農業を営んでいて自給自足をしているイメージ。食べ物が新鮮で美味しい。空気がきれい。緑が多い。土地が広くてのびのびしてる。一軒家が多い。星空が綺麗。空が広い。車社会。虫や動物が多い。

大学生調査員の田舎に対するイメージは、自然の豊かさや人の温かさ都市化していない

ことや不便さに対するイメージが多く見られた。都会からの田舎へのステレオタイプな見方が現れているようであった。つぎに、出会う前の中山間地域の高校生へのイメージを紹介する。

【中山間地域の高校生のイメージ】

・都会の高校生とは異なり、地域の中で、地域の人たちと触れ合いながら大切に育てられ、且つ自然体験などを通じてアクティブに育っているイメージがあります。豊かな自然が身近にあるため、自然と共存し、生きるパワーがありそうだなと思います。
・川などで遊んだり、外で部活動をしているためにとても日に焼けているイメージ。都会の高校生のように髪を染めたり、派手な化粧をすることがない、純粋で素朴な高校生。地域の大人、町の人との絆があり、挨拶をする。のびのびと育ってきている。
・学校や進路において都心にいる生徒よりも選択肢が少ないため、限られた進路を歩む人が多そう。様々な選択肢があるということすら周知されてなさそう。大学進学や上京する生徒は U ターンすることを前提にしていそう。
・聞いた話だけですが、おそらく生まれてからこの地を一度も離れたことがなく、関わって来た友達や近所の人もずっと固定のメンバーであると思うので、恋愛面などであまり複雑なことを考えたことがない純粋な子供達が多いイメージがあります。
・のびのびと育っていそう。お金を使う遊びではなく部活や友達との時間を大切に出来ていそう。大学に進学する人が少なそう。地元に就職しそう。自転車で通学してそう。擦れてなくて純粋な青春をしてそう。学ランとセーラー服を着てそう。
・都会の高校生より自然と共に育っているため、野生心がありそう。そしてコミュニティが小さいため仲良くとけ込めるか、また離れてしまうかにその人次第で変わってしまいそう。進路に対し、都会の高校生よりアバウトな感じがあると。
・すごく元気で活発で、いつでも外で遊びますっていうイメージがあったが、みんなの話を聞いていると、意外と普通で、クールな面もあるのだろう。でも、友達や内輪同士だと、すごくはっちゃけたりするのかな？っていうイメージ。

大学生調査員は、出会う前の高校生に対して、都会と違う環境で育ったことからなる純朴なイメージを持っている傾向があった。都会に染まらない純粋さを強調している傾向があった。大学生調査員自身との違うパーソナリティを高校生側に期待していた。

次は、交流直後の中山間地域の高校生へのイメージの変化についての記述である。

【交流開始直後の中山間地域の高校生へイメージの変化】

・失礼ではありますが、吉賀町の高校生はもっと純粋で、学校に行って午後は外で遊ぶくらいの人だと思っていたが、話してみると、みんな多趣味で流行りの韓国や携帯ゲーム機などに興味を持っていて、やはり日本の高校生であり、価値観の違いとかまで思っていたが、そんなのはあまり

ないのかなと思った。
・意外とはやってることは私たちと変わらなそうだった。やはり素朴。みんなあんまり、グイグイではないところ。
・もう少しコミュニティ内でわいわいと話すイメージがあったが、どちらかというとおとなしく、イメージと異なった。
・遊ぶ場所があまりなく、家や近所の道で遊ぶところが多いところは私のイメージ通りだった。しかし、田んぼで遊んだりするわけではない点は私のイメージを変えた。
・大学生が中心になって意見を言わない高校生がいるのかなと思っていたが自分の意見をしっかり述べる高校生がいて感心した。
・生徒同士が非常に仲が良く、元気いっぱいといったイメージはまさしくその通りでした。また、あまり風邪を引かないといい生徒が多く、それもまた予想どおりでした。田舎がだるいとか、買い物する場所がない、遊ぶ場所がないなどの多少の不満を持ってたりするのかなぁと思ったりしていたけど、決してそのようなことはなく、みんな町が大好きで、次々と町の良いところを教えてくれました。
・都会の人と比べて町に向き合う姿勢やしっかりとした考えがあることは想像していた通りであった。また私が持っていた人見知りがなさそうで盛り上がるといったイメージに関しては、結構シャイや大人しい子が多く、最初は中々意見が出なかったことがあり違う点であった。
・本当に、純粋。話をしていて棘がなく、裏表がないと思った。でも、シャイな子もいて、都会とか田舎とか関係なく色んな子がいる
・田舎にはアミューズメントパークなどが少ないので不満が多いのかなと思っていたが高校生は吉賀町のいいところをたくさん教えてくれたのでそこまで不満に感じてはいなそうだった。遊ぶところが少ない分友達と家で遊んだり話したりする子が多いのはイメージ通りだった。
・人見知りをしていたところがイメージと異なっていた。それに対して、自分の町のことをしっかり考えていたところがイメージ通りだった。
・進学を考える際、地元志向が強いと思っていたが、意外にも都会への憧れがあったことが意外だった。しかし、首都圏に出ても、将来は地元に戻ってくると言っていたので、そこはイメージ通り。

初めての交流直後には高校生のイメージが当初の想定通りの点と違う点があることに気がついた。田舎の高校生が以外と都会の大学生と同じところがあることや、同じ高校生でもいろいろなキャラがあることに気がついているようだった。大学生調査員は、都会的な視点から想像していた田舎の高校生像が変化していった様子であった。田舎の高校生の積極的な点とおとなしい点が複雑に存在していることに触れていた。

次は、高校生の研究活動に参加した直後の大学生研究員の記録を紹介する。

【高校生の研究活動に参加した初日】

・高校生は疑問を沢山あげてくれるのは素晴らしいことであるとおもった。それと同時に自分が疑問に思うことに関してそう思った背景や、疑問の予想、仮説を自分なりに考えたらいざ調査を始めた時によりよい反応が自分の中で得ることができると思った。それらを高校生にアドバイスをした。今回担当した班の子たちは今回私たちが入ったことによって、議論が活性化したり、どのような方向で調査を進めていけばいいのかということがわかったと言ってくれたので力になれてよかったなと感じた。

・高校生達が、授業の一つとはいえ、自分たちの住む町のことについて真剣に考えている姿が印象的でした。わたしは都会に住んでいて、自分の住んでいる町の自然が自分たちの生活に直接関わる体験をすることがないため、自分たちの身の回りのことを考えることは、自分たちが生きていくことにつながることが当たり前のところで生活しているのだということがわかりました。しかし、それは、環境は違っても、私たち自身に対しても言えることだと感じました。自分の生活する環境は自分で守っていくことが求められていると感じました。

・吉賀町に住んでいても吉賀町で物を買っていない人がほとんどだと聞いて、住民すら吉賀町でお金を使わないがゆえに過疎や人材の不足などが起きるのではないかと思いました。 私たちの班は吉賀町の商業についてやりますが、ほかの班の発表を聞いて、どの分野の問題も繋がっていて、切っても切り離せない関係にあると感じました。 高校生とアイスブレイクで、高校生に休日の過ごし方を聞いたら、家で友達と遊ぶと言っていました。都会に住む高校生は映画やテーマパーク、ファミレス、カラオケなどに行って遊びますが、吉賀町の高校生は行き場がないから友達の家で集まってゲームやおしゃべりを楽しむと聞いて、純粋さを感じました。お金を使わずに友達との交流そのものを楽しめるというところに魅力を感じました。

・今日実際に吉賀高校の生徒さんたちと話をして、緊急搬送するときに近くの病院である六日市病院は、大きな手術ができないということを聞き、ドクターヘリがあるとはいえ遠くの病院に行くのは患者さんに負担がかかるのではないかと考えた。また、ドクターヘリは天候次第だと飛ぶことができず、搬送に安定性が足りないのではないかと考えた。 この話を聞いてやはり近くの病院ですぐに手術ができる環境を整えることが移住者を増やす上では必要となってくるのではないかと考えられた。

・ディスカッションで大学生が進行をしてやっていたが、高校生も質問にしっかり答えていたし、楽しんで参加していてくれたので、真面目で素直な子だなぁと感心した。班の発表をしていたので他の班の発表を聞くことができなかったが、一緒に発表を頑張った高校生がとても真剣に自分の調べたことを伝えていて、自分が彼の年齢の時はこんなこと全くできなかったし、すごいと思った。自分も人前で発表をするのが苦手なので、もっと訓練していかなければいかないと思った。明日から山でのワークがあるのでしっかり吉賀町の自然を感じ学んでいきたい。

・このアントレプレナーシップから、私はまちを活性化させるためには改善点を見つけるべくまず成功している商店街との比較が必要であると考えた。また、今と昔との違いについても見ていくことで発見し工夫を考えることが出来る。高校生の取り組みが成功するよう、私は東京で笑顔

溢れる商店街を探していこうと思った。また、高校生が主体となって考えたことを取り組めるアントレプレナーシップについてもう少し理解を深めたいと感じた。

・意外だったのは県外から通う T 君が、将来上京せずにここで働いて暮らしたいと言っていたこと、そして、寮生活を家と同じくらい快適に過ごせているということ、だった。また T 君は吉賀町のいいところは？と聞かれると少し困っている様子だったが、吉賀町での暮らしをよく思っているように感じた。アントレでは、高校生は、「高齢化が進んでいる。」「交通機関が改善されれば、もっとまちは栄えるし、町の人の暮らしも豊かになる。」とまちのことをよく見て、考えられているなと感じた。ただ、研究方法が 1 パターンで、「役所にインタビュー」としか考えられていなかった。私たち大学生からは、「補助金を受けている施設の人にインタビューする」「役所のホームページのデータを調べる」「町に暮らす人の意見をインタビューできく」などを提案した。少しは研究のお役に立てられたかなと思った。

・吉賀町の高校生は、本当に故郷である吉賀町が好きで、よく観察しているなぁという印象でした。お米を使った商品を開発して町づくりをしていきたいと話している生徒だったり、もっと吉賀町でも高度な技術の医療を受けられるようにしていきたいと話している生徒がいて、高校 1 年生からしっかりと地域活性化について考えていて素晴らしいなぁと思いました。最期に高校生が、「大学生にこれまでのサポートをしてもらったから、アントレの授業をこれから真剣に受けていかないと申し訳ないと感じた」と話してくれたのを聞いて、こうした謙虚な向上心が大切なんだなぁと逆に学ばせられました。

・班の高校生は町内・町外の人で分かれていたが、それぞれが自分たちの町として吉賀町のことを考え向き合っているのだなとテーマを通した意見を聞いて感じた。町のためになにができるか、どうしたら町がより良くなるのか、なぜこの現状であるのか、高校生なりに道筋を立てて意見を持っていたことが都会に住む私に取って新鮮であった。私たち自身、自分が住んでいる場所の交通機関で困ったことはないし、補助金などどういった状況なのか考える機会が殆どない。高校生が町の行政について考え疑問を持つことで、役場の人たちだけでなく町の人の視点に立った町おこしに繋がるのではないかと感じた。

・初めは自分達のテーマについてなんの関心もなかったように見えたが、大学生のサポートによって意見を少しずつ出し合うことで少しずつ興味を持ち始めグループ内の会話も増えていったので今回のグループワークの方法は良かったと思う。難しく考えたり枠にとらわれると意見が出ずらいため、大学生が簡単な質問を投げかけながら進めていくことで円滑に進んだ。大学生と高校生のやり方の違いは、大学生は結果から手段を考えるのに対し高校生は手段から考えていたので中々進まないのかなと感じた。

・高校生の今まで取り組んできた研究内容を見て色々と疑問点やアドバイスをしていたが、吉賀町のことをよく知らなくて、都会で生活しているわたしたちだから気づくことがあり、吉賀町のことを知っている高校生のみんなだから分かることがあるという事を実感しました。今日お話を伺った方々はそれぞれ自分の強い意志があって活動しているんだと感じました。自分の生まれ育った町(そうでない人もいるかもしれませんが)の事だからここまで一生懸命に取り組めているの

かと感じました。
・吉賀高校の生徒は自分たちの町である吉賀町のことをよく見ていると感じた。吉賀町をより良くするためにはどうすればいいのかよく考えていると感じた。それに対して、私は自分の町のことをよく見ていないと考えた。高校生は吉賀町の行政について自ら調べてしっかりと考えていたが、私は自分の町の行政について何も知らないと考えた。また、吉賀町は東京とは異なり、多くの人が自分の町をより良くしようとしていると考えた。私は補助金がどこから出ているか考えたことがなかったが、吉賀高校の生徒はそのようなこともしっかり考えていると感じた。
・高校一年生が、ここまでしっかりとアントレプレナーシップ教育の課題をこなしているとは思わなかった。まだ社会のしくみもいまいち理解していなかったり、自分たちで行動を起こす力も乏しいはず。しかし、これだけしっかりリサーチ出来ているのは、アントレプレナーシップ教育の賜物だと感じる。次に、受け答えがしっかりしていると感じた。こちらの問いにもしっかり答えてくれたし、アイスブレーキングでもしっかりと自分をさらけ出してくれたのでとてもコミュニケーションが取りやすかった。
・高校生とアイスブレイクした際に「高卒はやっぱりあまりよくないですか？」という質問をされて、吉賀町周辺の大学の少なさ、学べる環境の整備が進んでいないのかなと感じました。しかし、今日、エコビのスタッフさんの話を聞いて、大学へ進まなくても地元で農作業で恩を返すということも良いことだとも思いました。学ぶことが全てだとも思わないし、中山間地域住民のそれぞれのライフスタイルに沿った将来設計を考える授業を学校内で取り入れる必要があると思いました。

高校生の研究活動に参加してすぐ、大学生調査員は一方的に高校生を指導する立場ではない自身のありかたに気がついたことが特徴的であった。都会と田舎でそれぞれ違った視点があることに気がつき、異質な他者との交流によって、自身のあり方を問い直す機会となっていることにつながっている可能性が示唆された。大学生調査員と高校生が互いに刺激し合いながら自身と地域との関係を問い直しながら調査を設計することにつながっていった。大学生調査員は内省的になり、協働研究への第一歩を踏み出していた。

本稿で研究活動の導入部分で得られたごく一部のデータの紹介となったが、あらたなデータの紹介と詳細な分析は稿を改めたい。この取り組みについては、樋田大二郎(2019a, 2019b, 2018)、樋田有一郎(2018)、熊谷(2018)、大木(2018)、寺崎(2018)で紹介している。あわせて参照されたい。

＜謝辞＞

本研究の一部はユニベール財団による助成を受けている。手厚いご支援をいただいた財団に深謝する。本稿の文責は筆者にあるが、地域人材育成研究会の研究の一部であり、特に、樋田大二郎氏、寺崎里水氏、大木由以氏、杉本卓氏に感謝を捧げたい。そして紙幅の制限からお名前をあげることはできないが、島根県立吉賀高等学校、吉賀町立柿木中学校、吉賀町

役場、NPO 法人エコビレッジかきのきむら、吉賀町の地域住民の方々は協働研究者として指導者として援助者として様々な立場から多くの示唆と支援を頂いた。

＜参考文献＞

藤岡慎二．2016．「辺境で進む教育改革：高校魅力化プロジェクトと地域課題発見解決型キャリア教育による学習意欲学力向上、高大接続改革への取り組み」下町壽男・浦崎太郎・藤岡慎二・荒瀬克己・安彦忠彦・溝上慎一『アクティブラーニング実践Ⅱ：アクティブラーニングとカリキュラム・マネジメントがよくわかる』産業能率大学出版部．101-133.

藤田卓郎．2015．「アクション・リサーチ再考―結果の一般化に焦点を当てて―」『外国語教育メディア学会（LET）関西支部 メソドロジー研究部会 2014年度 報告論集』(6):117-129.

樋田大二郎．2019a．「高校魅力化プロジェクトと地域貢献主義の台頭 ：『都鄙間高大協働研究活動』の授業開発から見える高校教育の転換」『青山学院大学教育人間科学部紀要』(10):19-35.

樋田大二郎．2019b．「町民を本気にさせた発表会(特集・地域づくりと人づくりを押し上げる「高校」 ～”魅力を発信”地域の中心に高校がある～)」『舞たうん：まちづくりネットワーキングえひめ』(139):1-5.

樋田大二郎．2018．「高校生と大学生の協働研究という大学授業改革 ：『視点の相互借用』『伝えるための能動化』の観点から 」『青少年問題』 65:16-21.

樋田大二郎・樋田有一郎．2018．『人口減少社会と高校魅力化プロジェクト： 地域人材育成の教育社会学』．明石書店.

樋田有一郎．2018．「都鄙間高大連携型協働研究の意義 ： 高校生のサクラマス型自分探しの学習に焦点をあてて」『青少年問題』 65:34-39.

樋田有一郎．2016a．「人口減少時代の地方郡部の高校教育の変化： 学校知の変化と魅力化(学校)コーディネーター制度に着目して」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』 別冊(24):81-92.

樋田有一郎．2016b．「新たな協働・公共性の主体の教育： 離島・中山間地域の高校生のソーシャル・キャピタル形成についての考察」『日本学習社会学会年報』 (12):44-54.

熊谷修山．2018．「高校教育改革としての高校生と大学生の協働研究」『青少年問題』 65:22-27.

草郷孝好．2007．「アクション・リサーチ」小泉潤二・志水宏吉編『実践的研究のすすめ： 人間科学のリアリティ』有斐閣．251-266.

大木由以．2018．「社会教育(生涯学習支援)改革としての高校生と大学生の協働研究」 『青少年問題』 65:10-15.

寺崎里水．2018．「大学生は何を学んだのか ： 高・大協働研究の意義」『青少年問題』 65:28-33.

＜付録＞

下記の研究集会で、下記の演題で、本研究課題および他の研究課題をもとにした発表を行った。
発表資料の一部を付録として添付する。

樋田有一郎、「都鄙間高大協働研究活動と異文化感受性発達―聞き書き教育に関する実証的研究―」2018 年度 早稲田教育学会大会，早稲田大学，2019 年 3 月 9 日

※発表資料は個人情報に関わる点他で一部修正してある。

2019年3月9日
２０１８年度早稲田
大学教育学会大会
1C-5
16号館311教室

都鄙（とひ）間高大協働研究活動と異文化感受性発達
―聞き書き教育に関する実証的研究―

樋田有一郎

専門領域

- 教育社会学、農村社会学、教育学、コミュニティ政策、地域活性化論、社会調査法

- フィールド

→中山間地域

- 研究テーマ

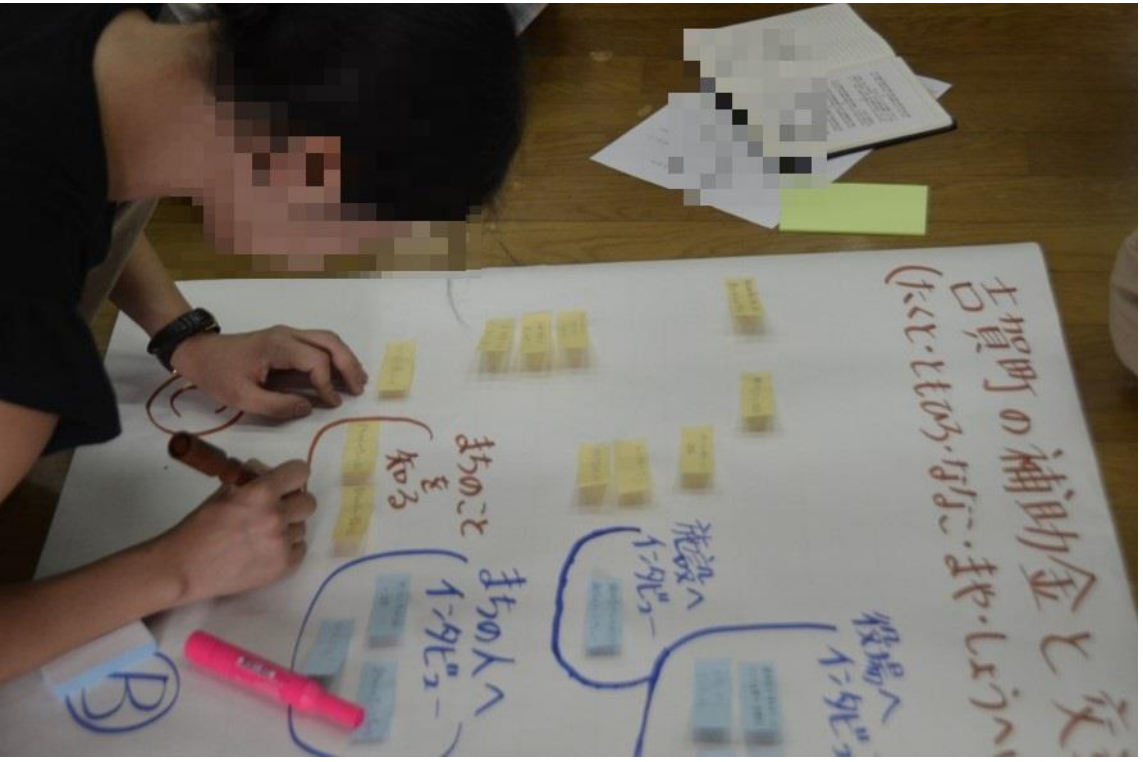
人口減少社会、地域活性化、ライフコースと地域移動、地域人材育成のための高校教育改革

都鄙間高大協働研究のアクショ・ンリサーチ

島根県
吉賀町
&
吉賀高校

境港
松江
米子
鳥取県
鳥取
舞鶴
出雲
安来
朝来
福知山
京都府
琵琶湖
滋賀県
大田
島根県
津山
兵庫県
京都
江津
岡山県
浜田
庄原
姫路
益田
広島県
岡山
赤穂
神戸
大阪
奈良
倉敷
津和野町
福山
長門
広島
尾道
大阪府
奈良県
高松
廿日市
呉
丸亀
淡路島
和歌山
山口
岩国
香川県
鳴門
防府
今治
山口県
宇部
新居浜
徳島
光
松山
西条
徳島県
御坊
和歌山県
四国
田辺
愛媛県
白浜町
吉賀町
島根県鹿足郡
Map data ©2019 Google

キャンパス
＊青山キャンパス
学部・教育人間科学部・経済学部・
学部・経営学部・国際政治経済学部
総合文化政策学部
相模原キャンパス


まちのことを知る
まちの人へインタビュー
役場へインタビュー

20 島根 吉賀高校
なか吉 プリン
300円
6 神奈川 川崎高校
養蜂部 どら焼

「都鄙間高大共同研究」授業の事例紹介

◇2018年度都鄙間高大協働研究概要
◇吉賀町訪問調査　　8月24日(金)～8月27日(月)+数回
◇大学生アレンジ東京調査 10月 3日(水)9時～17時
◇2018年度代表者　樋田有一郎
◇高校生　島根県立吉賀高校（高校魅力化校）1年40名
◇大学生　青山学院大学生、法政大学生他　27名
◇後援　吉賀町役場、ＮＰＯ・エコビレッジ（吉賀町）
◇支援　吉賀町住民、都内各団体
◇助成　ユニベール財団研究助成

これまでの参加実績

- 2017年

→法政大学、青山学院大学、慶応大学、東京大学
計25名

- 2018年

→法政大学、青山学院大学、上智大学
計27名

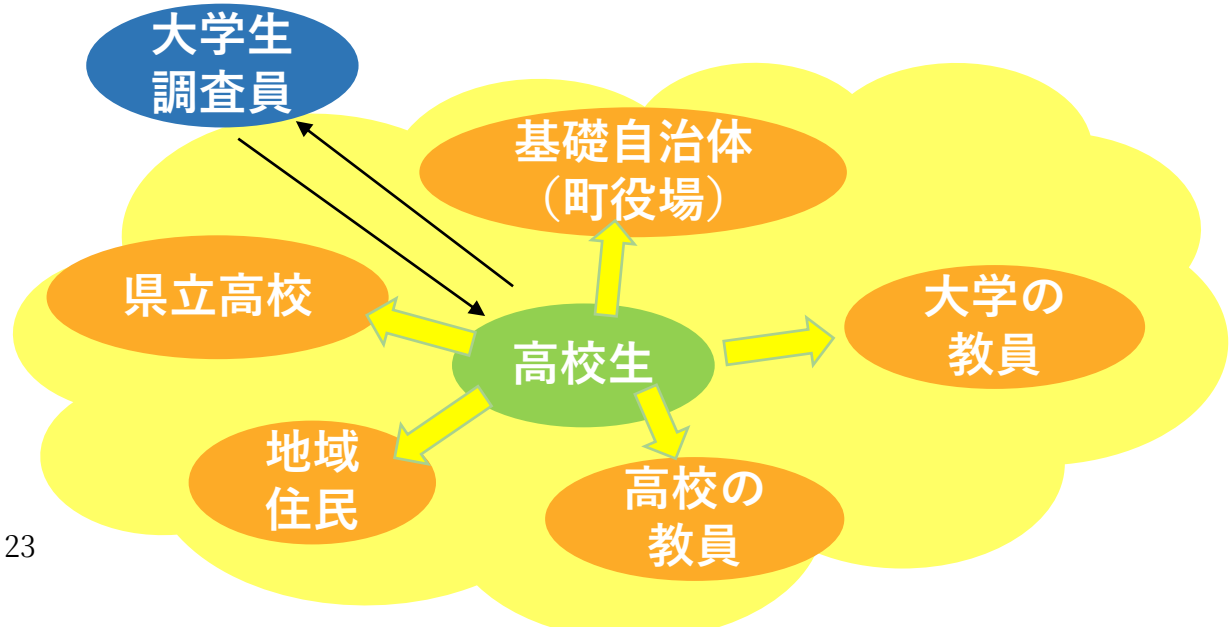
※インターカレッジチーム

※2015年から2016年は東京ラウンドのみで実施

→→「都鄙間高大協働研究」

中山間地域及び中山間地域の高校と東京の大学生が協力して、中山間地域の高校の教育改革の一環として地域課題解決型学習や地域活性化を行う協働研究。

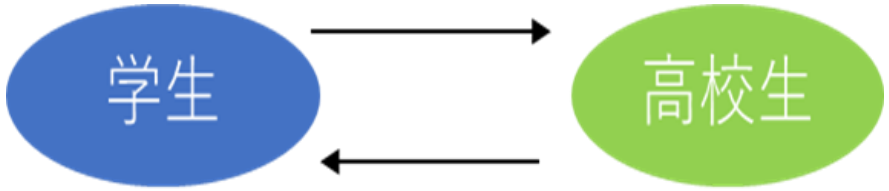
- 地域当事者性の育成
- 相互に影響しあう関係性



＜特徴・魅力＞

・地域当事者性の育成

・相互に影響しあう関係性



◇大学生は異質な環境の高校生に出会って他者性を獲得し、自分自身の地域に対する課題や魅力、可能性に関する理解が深まる。

◇高校生も他地域の大学生との関わりにより、自分自身の地域に関する理解が深まり、自分たちがどれだけ地域に愛されているのか、自分の地域にどれだけ可能性があるのかを気づく機会となる。

その他の特徴

◇高校生たちの進路、都市流出について考える機会となる。

◇大学生は高校生たちの成長・変化を感じ、「豊かさ」について再考する機会となる。

◇当事者性を持ってほしい　自分たちが持っているものに気が付く機会となる。

都会の大学生と田舎の高校生の協働研究

　大学生は、他の年代にもまして、学習と自己実現・自己表現の場である。※大学生は学習者＝アクション・リサーチャーとして教育支援を行う。

協働研究活動の活動例

①イベントや授業の協働開発者となる。
②イベントや授業の中で生徒と協働学習者となる

◇アクション・リサーチャーとして重要な心がまえ３ザル（観察者）ではなく、３ヤル（支援者）

見ざる→→見入る
聞かざる→聴き入る、
言わざる→伝える（＝する）

生徒に対する働きかけで大切なこと

①挑戦的協働学習者である
②相互影響的関係（共感、枠組の相互受容）の構築
※生徒の意識では、教員は「上から目線」、大学生は「斜め上からの寄り添い目線」または「共同注視」
③高校生と大学生相互の視点の借用
④相互に自分の普通を問うきっかけ

協働研究の地域貢献

①隠れている課題のアジェンダ化
　「若者、ばか者、よそ者」としての介入
②学習支援への協力誘発と地域住民の能動化の誘発
③地域住民の中の「よそ者使い」力の覚醒
④挑戦的学習者による地域資源と地域の生態系の活用・覚醒化・変容

プログラムの構成

事前学習（座学）

※2018年度は吉賀町から役場担当者、
吉賀高校魅力化コーディネーターを招聘

フィールドワークに必要な知識・技能・態度を修得させる
ex.社会調査法、チームビルディング、訪問地域特性の学習

前後2ラウンド形式（フィールド調査）

- **中山間地域ラウンド（前半）**：大学生が中山間地域を訪問
自治体（企画課、定住促進課、県立高校支援課）、地域住民（NPO）、高校（生徒）の協力を得て、地域での調査及び教育支援
- **東京ラウンド（後半）**：高校生が東京を訪問
大学生が前半を踏まえて、東京に来訪する高校生の東京での調査、研究活動をフルコーディネート

中山間地域調査（前半）の構成

- 高校でのディベート
→高校生班に大学生班がつきっきりで調査の支援（大学生と高校生各10班）

- アンケート調査支援
高校生作成アンケートの実施

- 地域活性化を行う地域住民のライフストーリーインタビュー
地域活性化の主体性の調査。町の魅力としてのヒト。

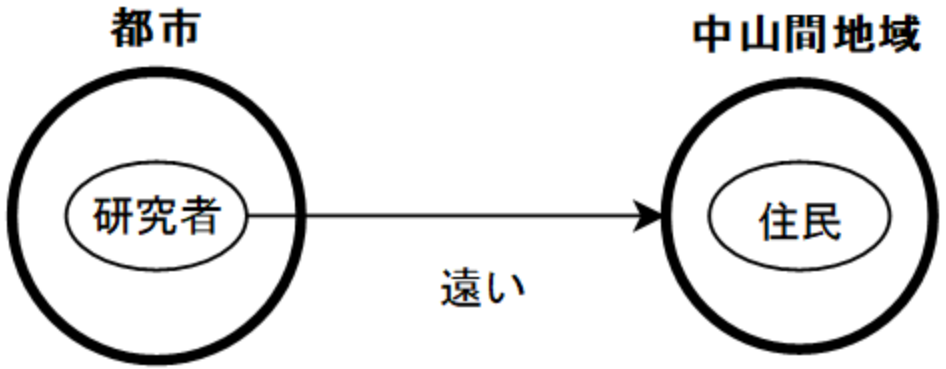
- その他、地域特性の調査（山・川・史跡）
山（林業）、川（内水面漁業）、史跡（山林の住居跡の調査）

訪問調査時（中山間地域）のスケジュール（抜粋２日分）

8月25日（土）		8月26日（日）		
中学校	高校	体験①	体験②	体験③
《柿木中学校》 川遊び有	《吉賀高校》 地域クラブ フィールド	体験① がっつり川 川をしる 鮎竿がけ 鮎網漁	体験② がっつり山 山を知る 林業を知る 林業機械を知る	体験③ がっつり史跡 昔の林業を学ぶ 歴史的建造物探訪 産業の栄枯盛衰
		入浴 はとの湯（にごり湯）		
		歴史文化交流 「石見神楽を知る」		
吉賀発熱い想いを聞く①		BBQ交流会 ～いろんな人と交流しよう～ BBQ キャンプファイヤー 花火 （関東大学生と地元大学生とスタッフ）		
夕食				
吉賀発熱い想いを聞く②		吉賀町研修を振り返って 《研修センター》		

大学生調査員の当事者性の変化１（はじめ）

①フィールドに入る前



＜研究者のあり方＞

- 地方に対する漠然としたイメージ
- 自身は孤立を愛する
- 地域を神聖視
- 地域に対して平和なイメージを持つ
- こうすればうまくいくのに！どうして！という都市的な地方変革意識を持つ
- 地方の後進性を感じる

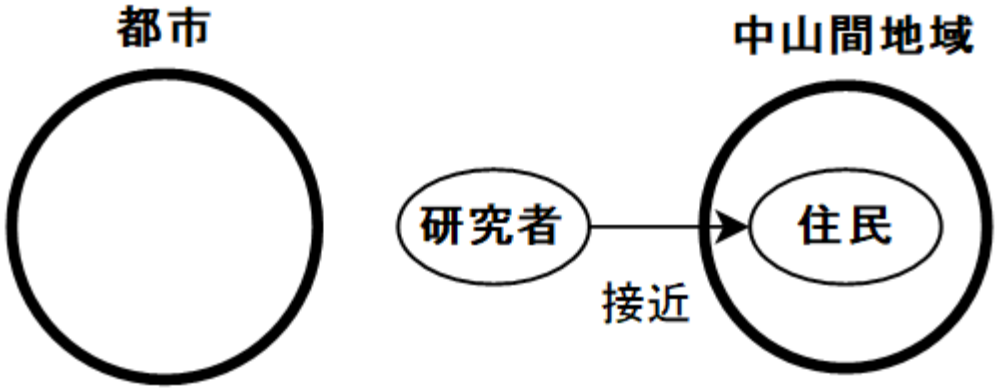
＜住民側の態度＞

- お客様扱い
- 少し聞いても秘密の話をしない

異文化感受性発達モデル
TheIntercultural
Development Inventory(Bennett)

大学生調査員の当事者性の変化２（途中）

②フィールドに入る途中（近接）



＜研究者のあり方＞

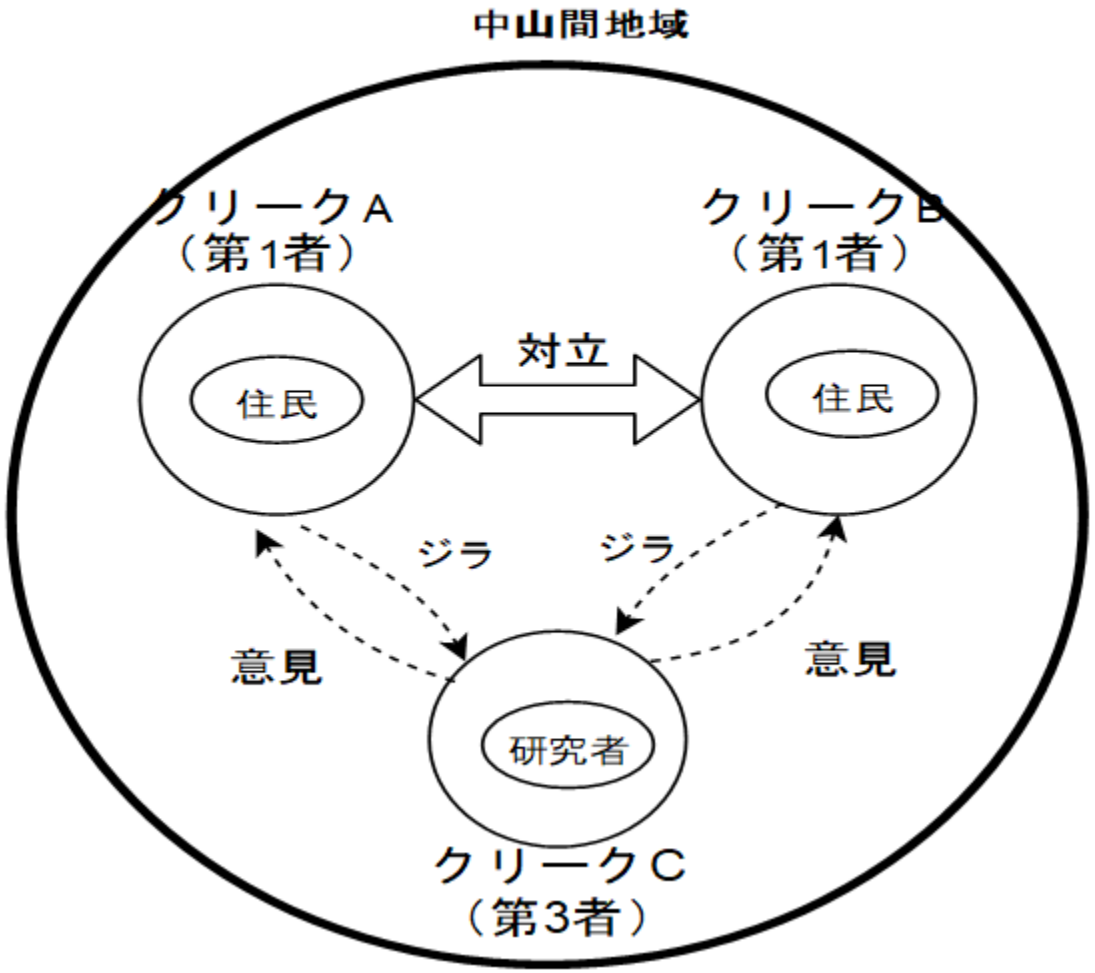
- 中山間地域の価値観に近づく
- 地域を見下したりしない
- プライバシーがないことが辛い

＜住民側の態度＞

- 秘密の話をしてくれるようになる
- しかし、地域内部の対立・葛藤を**含まない**話題が中心

大学生調査員の当事者性の変化３（最終）

③フィールドに入り込む(内部へ)



＜研究者のあり方＞

- プライバシーのなさに安心感や信頼感を持つようになる
- 第3者となる研究者≒住民としての当事者性AにもBにも与しない

（＝染まらない=既存の住民になりきらない）ことが求められる

＜住民側の態度＞

- 秘密の話

かつ、対立・葛藤を含む話

＝地域活性化のキーとなる話をしてくれるようになる

フィールドノート指導

※寺崎里水氏、樋田大二郎氏、大木由以氏の共同で作成

フィールドノートの心得

①現場でまず書くこと
日付、時間、場所、天気、一緒に行った人

②現場では何を書いてもいい
絵でもいいし、マンガでもいい。気付いたこと、発見したこと、考えたことなどを、あとで見て、思い出せるように書けばいい。
上手く書こうとかきれいに書こうとかしなくていい。整理しないでダラダラ書く。
鉛筆でも赤黒２色ボールペンでもなんでもＯＫ。

③戻ってきてから追記する
記憶が新たなうちに現場で感じたことを文章にしてみよう。
書くことで頭のなかが整理され、反省点、改善点、ひらめきが起こる。できるだけ起こったこと全部を記録に残すこと。
入手した資料があればリストにしておこう。

④ときどき中間まとめのページをつくる
自分の記憶力を信じない。驚くほど忘れるから、半年後に見ても、何のことなのか分かるようにまとめておこう。

⑤フィールドノートは財産
体験に裏打ちされた言葉は生きた言葉、使える言葉になるから、フィールドノートは財産です。大切にね。

ITを使ったフィールドノート

- フィールドノートの取り方の事前指導
- フィールドノートは毎日電子化して、スマホ経由で提出する（Googleform）
- フィールドノーツ指導

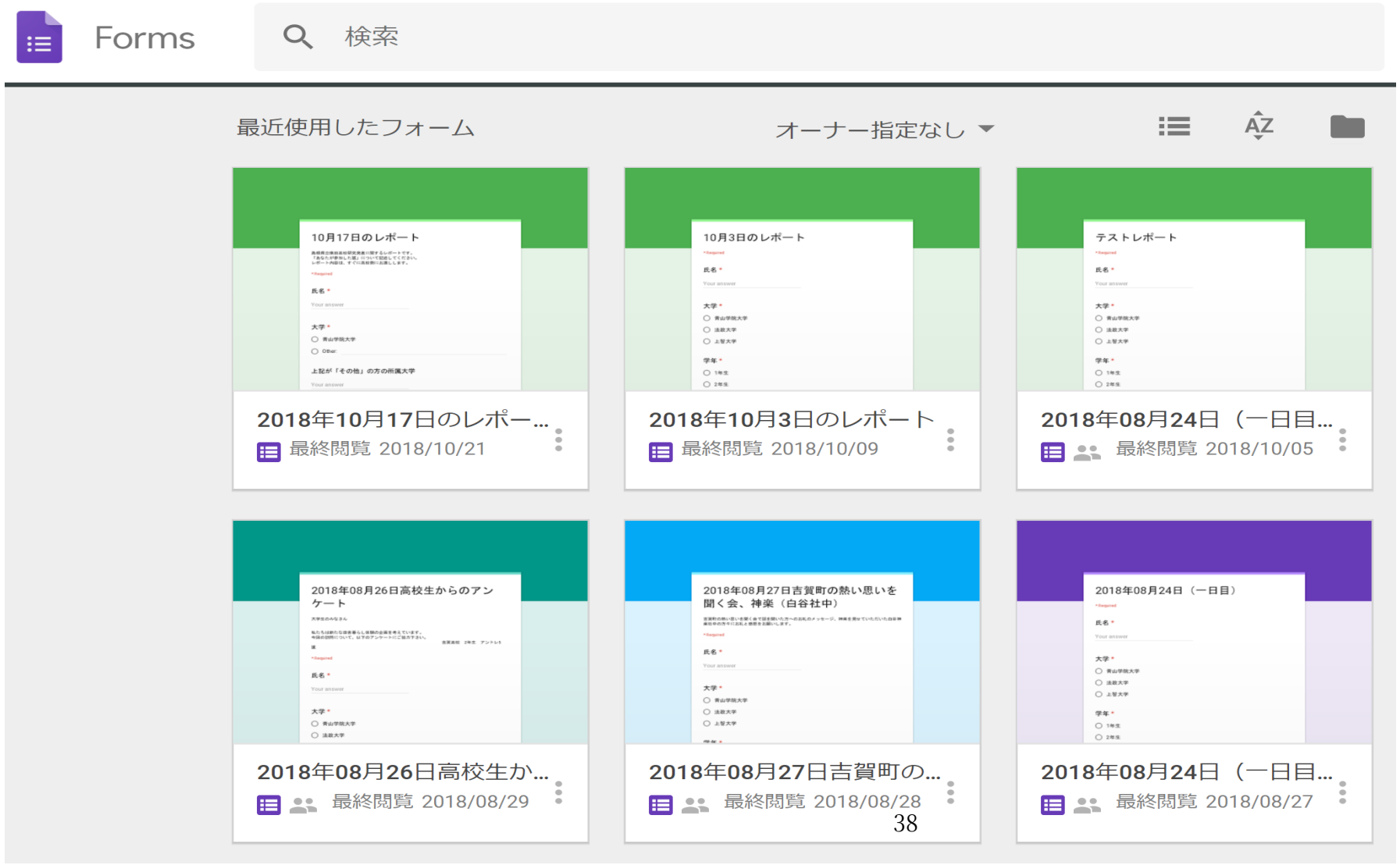
毎晩提出して毎朝全体で振り返りをする

- レポートもネットで提出
- 関係者（町、高校）に即時共有、フィードバック

→一回の調査支援活動による訪問で10000字程×20名強

数十万字のフィールドノート、調査レポートが完成する

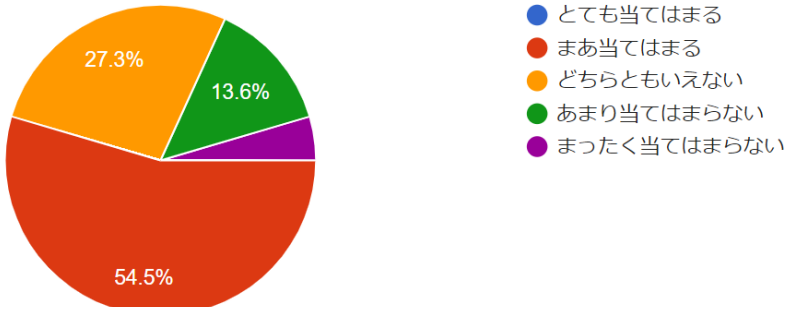
電子的なフィールドノートの収集 1



電子的なフィールドノートの収集２

Q1事前に持っていた中山間地域の高校生や中学生へのイメージは当てはまりましたか？

22 件の回答



Q3今日気が付いたことでみんなに伝えたいことは何ですか？（100字以上）

22 件の回答

柿木中学校ではなく、吉賀中学校は川での水泳授業ではなく普通にプールを使用しての水泳授業が行われている。神楽という太鼓や踊りの大会が今日行われている。とんぼやかえるを発見した。高校2年で就職するか進学するかを決め、それによってクラス分けされることも知った。

中学生の男の子が可愛かった。本当に無邪気だった。「行ってみたいところはある？」と聞いたところ、「新潟」と答え、その理由を聞くと「お米が美味しそうだから」と答えていて本当に驚いた。新潟へ行ってみたい理由が、予想外すぎた。

自然を利用した保健体育、課外活動では、大人たちがあまり関わらず、子供達同士で教えあいをしていた。飛び込みについてできない子がいたら、どうやればいいか教えたりしていた。これは教えることが目的ではなくみんなで順番に飛び込んでいくという、「遊び」の過程で教えることをしていたので自然の環境で大人たちが教えるだけではなく、教わらないで自分たちで発見していったものではないかと思った。

中学校が、あまり都会に憧れを抱いていなかった。話をした中学生に、東京に行ってみたいかと聞いたところ、観光としては行ってみたいが、住むところとしては吉賀町が好きだ、とのことだった。不便さや、都会へ

Q２どんなところが、イメージ通りでした？どんなところがイメージと違いましたか？（100字以上）

22 件の回答

純粋で自然のことを色々知っているところがイメージ通りであった。また、自然に親しんで生活をしているため、ためらいなく自然と触れ合おうとしていた。イメージと違うところは、誰しもが運動や虫が大好きだという訳ではないということだ。

もっと都会に憧れているのかなというイメージがあったのですが、全くそんなことなく、むしろ町を中心にして生活をし続けたい想いが強そうな印象を実際に受けました。地元での暮らしが楽しく、買うことができるモノや、機会は少ないけど、それでも満足している印象だった。

イメージしていたように中学生はとても活発で、川での課外活動も活発に活動していた。また学年間の壁が薄くとても親しげに話していて、自分の経験では先輩には敬語を使ってかしこまることが基本だったのでとても驚いた。

人と人との距離が近く、中学生たちが健康的であったところがイメージと重なった。一番近いコンビニが、昨日車で寄っていただいたローソンと伺い、買い物をする店の少なさ、距離感も想像と同じであった。
中学校がとても綺麗で、年季の入った建物を想像していたのでイメージと全く違い驚いた。

イメージ通りだった点は、都会では見られない近所同士のつながりがあるところです。おすそわけがある家庭もあるそうです。逆にイメージと違った点は、自分たちの生活に対して全く不便さを感じていないところです。都会への憧れもありませんでした。

小規模人数のため学年の壁なく皆が親しく接しているだけでなく私たちに対しても親しく接してくれた点から、街全体が相互に協力しあっている印象はイメージ通り。しかし多くの中学生が吉賀高校に進学することを考えてはいなく、誰も知り合いがいない高校や他の町への進学を希望している点がイメージとは少し違いまし

高校生からの質問に答えて
観光プログラム作り１

高校生からのアンケート

説明（省略可）

参加するまえどんな体験になると期待していましたか？ *

記述式テキスト（長文回答）

実際参加してみてどうでしたか？期待より上か下かでお答えください。

- 上
- やや上
- どちらともいえない
- やや下
- 下

吉賀町のイメージは訪れる前と後でどう変化しましたか。 *

記述式テキスト（長文回答）

吉賀町の食べ物はおいしかったですか？

- とてもおいしかった

吉賀町で他にどんなものを食べてみたいですか？理由も教えてください。 *

記述式テキスト（長文回答）

今回はいろいろなイベントがありましたが振り返ってみて全体として、楽しかったですか？ *

- とても楽しかった
- まあ楽しかった
- どちらともいえない
- あまり楽しくなかった
- まったく楽しくなかった

特に楽しかったことはなんですか？理由と一緒に説明してください。 *

記述式テキスト（長文回答）

参加して身になりましたか？

- とても身になった
- まあ身になった
- どちらともいえない
- あまり身にならなかった
- 全く身にならなかった

特に身になったと思うことは何ですか？エピソードを教えてください。 *

記述式テキスト（長文回答）

特に身になったと思うことは何ですか？エピソードを教えてください。 *

記述式テキスト（長文回答）

もっとこんな活動や体験がしたかったということについて教えてください？ *

記述式テキスト（長文回答）

今回の内容で、全額自費参加なら、いくらだったら参加しますか。（航空機代込） *

1. 30000円未満
2. 30000円以上50000円未満
3. 50000円以上60000円未満
4. 60000円以上70000円未満
5. 70000円以上80000円未満
6. 80000円以上90000円未満
7. 90000円以上100000円未満
8. 100000円以上
9. 自費では行かない

ズバリ吉賀町の魅力は何だと思いますか。 *

記述式テキスト（長文回答）

その他、この活動がもっと楽しくなるアイデアについて自由にお書き下さい。 *

記述式テキスト（長文回答）

高校生からの質問に答えて
観光プログラム作り2

参加するまえどんな体験になると期待していましたか？

27 件の回答

- 川を満喫できると考えていた。川に普段関わることがないからとことん関わりたかった
- 地元の文化を体験すること。25日やくろ鹿の伝説でも、26日の神楽でも、日本の地元の文化を満喫していました。
- 去年出会えた人たちと再び交流することで去年出来なかった発見をすることを期待していた。
- 山や川で遊ぶような、高校生たちと自然と触れ合う体験を期待していました。
- 吉賀町の自然や特徴を生かした体験ができるのではないかと期待していた。
- 昨年も参加させて頂いていたので、楽しい体験になることは間違いないと思いながら、今回はより自分自身の学びに昇華できればなという想いを抱きながら参加しようと決めていました。
- 川遊びで高校生とたくさんはしゃげるかなあと期待してました。！
- 3日間とも高校生とワイワイ遊ぶような感じのものになると思っていました。
- 島根の高校生と一緒に自然と触れ合いながら、あそぶこと。また、地元のことについての課題点を考えること。
- 中高校生たちと交流して吉賀町と東京の生活や文化、しきたりなどをお互い話し合うと期待していた。
- 高校生や大学生と、地元の良いところ、特徴などが話し合える。

吉賀町のイメージは訪れる前と後でどう変化しましたか。

27 件の回答

- 訪れる前は去年のイメージと同じくらいに考えていたが、今年参加した時、大人だけではなく中高生も積極的に参加していて刺激を受けた
- 変わりました。最初は田舎なイメージを持っていましたが、吉賀町に来て、いろいろ変わって、本当にすごく魅力的な町だと思うようになりました。
- 去年体験することが出来なかった山登りの体験をすることで吉賀町の歴史と自然の偉大さを改めて感じた。人の温かさは健在していた。
- 訪れる前は、自然にそこまで魅力を感じていなかった。ただ山がある、川があるといったふうに、しかし参加してからは、魅力として打ちだそうとしている森や川などの自然にス
- った。
- 最初のイメージは自然が豊かな町で、山間部に位置しているため、高校生
- うイメージがあった。しかし実際は高校生は自分の想像以上に多く、人々
- 訪れる以前は"最高！！"でした。このイメージはなかなか変化すること、
- ました。でも変わりました、"超最高！！"に。
- みなさんがあたたかかったので、合宿限りかなと思ったけど、将来的に住
- かったです
- 近くにコンビニとかがなくて大変な生活をしているかと思ったら、不便さ
- がやりたいことを多く抱えていて充実していることがわかりました。

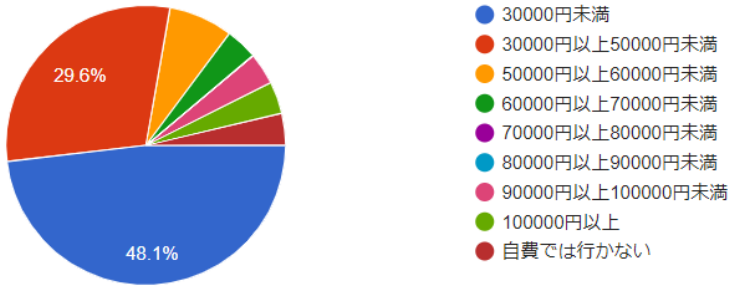
特においしかった食べ物は何ですか？理由を含めてお書きください。

27 件の回答

- 鮎。やはり、魚が好きということもあるが、川で取れたものを食べれる喜びが大きい
- 味噌汁が1番美味しかったです。東京のレストランで、なかなか味わえない味でした。
- あゆご飯。普段食べることのないご飯であることとあゆが好きになれたから。
- イノシシ肉。食べ応えがあっておいしかった。
- 鮎 やはり綺麗な川で取れたものかつ、新鮮なものだったので、非常に美味しかった。

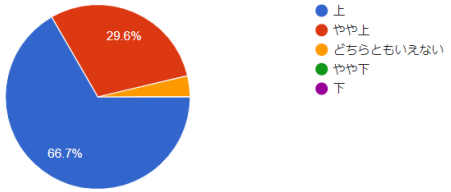
今回の内容で、全額自費参加なら、いくらだったら参加しますか。（航空機代込）

27 件の回答



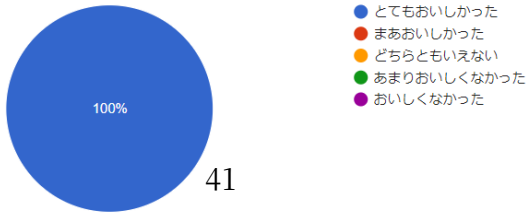
実際参加してみてどうでしたか？期待より上か下かでお答えください。

27 件の回答



吉賀町の食べ物はおいしかったですか？

27 件の回答



- 米以外の地元のもの。そうめん瓜、わさび、米はどれも素晴らしいがもっと世の中に大々的に売り出せるものがありそうだから
- イノシシのお肉食べたいです。なる君の話によると、すごく美味しそうです。
- 野菜。お米がこんなに美味しいのだから他の野菜も美味しいと思うから。
- もっと海鮮系の食べ物を食べて見たい。今回はできなかったが、自分で釣った魚などを食べたいという気持ちがあるから。
- 鮎以外の高津川に生息している川魚。 鮎をたくさん食べさせていただいてとても美味しかったので、他の川魚はどんな味がするのか気になったため。
- 吉賀のお米を使って作られた米焼酎『かきのきむら』が今年は飲めなかったので飲みたかったです。高校生

活動の３か条

- チームビルディング

協働研究の前提

- キャラ把握

出来るやつ、チャラいやつ、賢いやつetc自分と違うやつに出会う

- 信頼

オブザーバーは必要ない。必ず自分の役割を果たす。

調査の心得

- 資金集め

財団等助成+町・県立高校による支援（資金、人員、食材）

- **脱お客様大学生→地域の当事者性を持つアクション・リサーチャーへ**

住民VSよそ者として、<u>かわいがられる大学生</u>から、<u>地域の対立構造に飛び込める調査者</u>へ。

無色透明な観測者ではなく、地域の第三の当事者となる（アクション・リサーチ）。

※土の人と風の人（田中他 2015）

大学生調査員に望むもの

- 理論と実践の往還

→社会学理論を持ちながら実際に現地に行って調査を行う

→体験ではなくて貢献してほしい

→参加者にオブザーバーは要らない。

- 鏡像的他者の獲得

→東京にいるだけでは東京の良さはわからない。自分の地域や自分自身を見つけるための異質な他者が必要

地域が望むこと

- **関係人口**

→一回きりの出会いの場ではなく継続的な関係を望んでいる

- 地域の観光名所ではない地域の良さを理解してほしい

→田舎はどこにでもある。東京都から近い田舎だってどこにでもある。ある特定の地域との関係を作ってほしい

- **地域の名物は”人“しかない**

→中山間地域はいわゆる観光地として優れているわけではない。地域住民の生き方そのものが地域の名物

→ライフストーリー法での社会調査

東京ラウンド(2018年度)

- 中山間地域で一緒に活動した高校生10班の学習支援を行う。
- 大学生のコーディネートで高校生の調査支援

　研究目的、アポ取り、経路確認、下見、スケジュール作成等全て大学生が行う

- 高校生と一緒に（同伴して）活動　※訪問先で働く人へのインタビューを義務化
- 夕方に集合して班ごとの振り返りと全体でとりまとめ発表

東京ラウンド訪問インタビュー先一覧

第1班----------

- 台東区区役所環境保護課
- 荒川環境保護NPO

第2班----------

- キラキラ銀座商店街
- 墨田区役所町づくり担当者

第3班----------

- 特定非営利活動法人メンタルケア協議会＠代々木

第4班----------

- AKOMEYA 銀座店
- おむすび権兵衛 青山店

第5班----------

- 鉄道ジャーナル＠飯田橋
- 新宿駅構造見学

第6班----------

- 戸越銀座商店街 （商店街振興組合 広報）
- 戸越銀座視察

第7班----------

- 東京農業大学「食と農」の博物館
- 上記併設　進化生物学研究所 （研究員）

第8班----------

- 東京都福祉保健局医療政策部医療政策課

第9班----------

- 市ヶ谷フィッシングセンター、墨田水族館職員

第10班----------

- キラキラ銀座商店街（事務局長）

大学生(法政大学)による大学内での発表や町民への発表

- 調査データを用いて大学生は研究発表を行う
- 高校生の発表の場や町民集会でポスター発表
- 卒論などにも活用（ライフストーリー研究）

都鄙間高大協働研究の効果

地域人材育成の支援 大学生×高校生×地方郡部（中山間地域）×都市部（東京）での活動を通して、自身や自身の持つ地域の理解を可能とする。

中山間地域の高校生は高校卒業後ほぼ全員都市部に流出する。高校卒業前までに地方郡部と都市部を相対化して、それぞれの地域の意義を理解して、**将来地元地域にUターンして地域人材となることの意義を理解する。**

（**地域移動の意味が分からないまま都会へと流出して地域を忘れ、搾取されることを防ぐ**）

マスコミによる報道等 都鄙(とひ)間高大協動研究に関する報道

- 根石大輔. 2017. “吉賀の魅力探る 首都圏大学生が地元高生と交流.” 中国新聞, August 27.
- 平井優香. 2018. “島根の中山間地域・離島高校 都会地大学との連携進む.” 山陰中央新報, May 13.
- 吉野仁士. 2017. “吉賀高生 東京の大学生と意見交換 鳥獣被害や林業 調査研究.” 山陰中央新報, August 30.
- 吉賀町. 2018. “高大交流記事（吉賀高校支援室だより&移住・定住支援「首都圏の田大学生が吉賀町を満喫！」）.” 広報よしか, October, p10, p12
- その他学校広報、学校、町HP等

また、この取り組みは、地域活性化を行う高校の事例として紹介された。

- 初等中等教育局文部科学省. 2018. “内閣府 「第10回 経済社会の活力ワーキング・グループ」 文部科学省提出資料（平成３０年5月１８日 初等中等教育局）.”p3

URL: http://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/reform/wg7/300518/shiryou3.pdf （2018年12月1日閲覧）